

## 古典教育と作文能力 —中国学生の日本古典を題材とした作文分析を通じて—

菊地真

### 要旨

中国・北京理工大学で三年間、古典教材を用いて提出させた作文のうち、課題テーマを良く理解できた6例を選び、本人たちの掲載了承を取り、紹介し分析することで、古典学習を通じ、学習者の作文能力を強化できたことを報告し、古典学習の意義を確認する。

### キーワード

日本古典、作文、中国、大学、日本古典学習の意義

### 1. はじめに～古典学習の意義

日本語教育研究の一環として古典教育に関する議論も渡辺（1955）など早くからあったが、教育政策側の視点から古典教育の意義を論じたのは加藤（2007）で、古典伝承を途絶えさせないのが古典教育の意義という。石塚（2007）も古典の伝承は個人を超えた社会全体の問題という。加藤（2007）は生きるための知恵と勇気を古典学習による「物語経験」で会得できるというが、学習者にどう具体的意義があるかが不明である。串田（2016）は「文語文教育の意義は…多様な概念や価値観などの文化表象にアクセスし、それらを包摂する歴史的な脈を批判的な態度で読み解くことにある」と具体的意義を提示する。

従来、古典学習の意義に関連つけた古典の定義付けが軽視されてきた。最近の勝又（2019）でも議論の前提としての古典の定義が明らかでない。池田（1991）は古典を中国語の「古典」と欧米語の「クラシック」との融合概念と定義付けるが、この定義に古典を学ぶ意義をどう関連させるかの言及は不十分だ。藤原（2004）は「不易流行」で古典の意義を説明する。

師の風雅に万代不易あり一時の変化あり。この二つにきはまりその本一つなり。その一といふは風雅の誠なり。不易を知らざればまことに知れるにあらず。不易といふは新古によらず変化流行にもかかはらず誠によく立ちたる姿なり。代々の歌人の歌を見るに代々その変化あり。また新古にもわたらず、今見るところ昔見しに変わらず、あはれなる歌多し。これまづ不易と心得べし。また千変万化するものは自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず。…「かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時のおし移るごとくものあらたまる。みなかくのごとし。」とも言へり。（服部土芳『三冊子』「赤冊子」（岩波文庫））

藤原（2004）はこの下線箇所を指摘し、古典に普遍的なものを見出すことで人生の指針を得、現代と異質な考え方に触れることで現代を相対化する思考方法を学べるという。これを石塚（2007）は具体性がないと批判する。しかし「不易流行」は俳句を創作する際の心得で、日本語による表象をいかに達意なものに磨き上げられるかの議論である。

これを現代の日本語教育に敷衍するならば、学習者が独創的な日本文を書くために「不易」つまり「古典」を学ぶのは有効だという具体的な議論である。『三冊子』はいっぽうで

「千変万化する流行」も必須という。「流行」とは多様な価値観を受け容れることだ。これに続く「古人の涎をなむる事なかれ」とは、句を創作する際に「本当の自分」を古典と対比しながら自ら考えよということ、この発想は串田（2016）の指摘する「歴史的な文脈を批判的な態度で読み解く」ことにも通ずる。藤原（2004）の指摘には先駆的意義があった。

古典は多くの辞書類が「江戸時代以前の文」と説明するが、「この映画はラブコメディの古典だ」のように「亀鑑としての価値ある作品」の意味もある。本稿も、日本文を書く際に亀鑑となる文献を「古典」とみなす。『三冊子』の趣旨を延長すれば、「古典」は学習者に批判的思考を促し、個々人の多様な価値観を覚醒し、「私の真実」を知らしめ、独創的な発想を生ぜさせられる。ゆえに上超級向け作文学習教材として絶好なのだ。

和歌では古来、本歌取りという技法が用いられてきた。それに関する藤原定家の歌学書『詠歌大概』（13世紀前半成立）を見ると、古人が「古典」をどう考えていたかがわかる。

常に古歌の景気を観念して心に染むべし。殊に見習ふべきは古今、伊勢物語、後撰、拾遺、三十六人集の内殊に上手の歌心に懸くべし。人麿、貫之…等の類。和歌の先達にあらずと雖も時節の景気、世間の盛衰、物の由を知らんが為に、白氏文集の第一第二帙を常に握翫すべし。深く和歌の心に通ず…（藤原定家『詠歌大概』（『日本歌学大系』第三巻））

藤原定家は『新古今集』『新勅撰集』撰者で、『源氏物語』等多くの古典文献の書写もした、日本文化史上の巨人である。下線箇所、和歌を創作する際に「心に染む」べき文献、「殊に見習ふべき」文献が「古典」である。つまり「古典」は和歌創作に必要な亀鑑であるもの全てで、固定された概念ではない。古典学習の意義は後文でさらに明らかとなる。

…和歌に師匠なし。唯旧き歌を以て師と為す。心を古風に染め、詞を先達の者に習はば、誰人かこれを詠ぜざらんや。（『詠歌大概』承前）

和歌を学ぶならば人に習うより「古典」に習え。それを真摯に学べば、必ず歌を詠めるという。日本文化史上の巨人が八百年の時を超え、古典学習の意義を力強く主張している。この趣旨を延長すれば、日本文で達意の表象を目指す学習者は日本古典を学ぶのが最善ということである。日本語学習者は古典を学習することで、批判的思考を涵養でき、以前は反論できそうに思えなかった現代思想や現代社会をも相対化でき、「本当の自分」を見つけ、独創的な言語表象ができるようになる。その実例として以下の作文を紹介しよう。

## 2. 中国学生の作文実例紹介

今回紹介するのは菊地（2019）で発表された日本古典の新教材を用い<sup>(1)</sup>、提出させた作文実例である。受講者は北京理工大学4年生前期と3年生後期<sup>(2)</sup>で各期約20名、のべ約80名である。提出された作文は計約千二百枚で、設定されたテーマを理解し、それに沿って書かれた六例を選び、添削を踏まえ再提出させ、本人たちの掲載了承を取り紹介する<sup>(3)</sup>。

### 資料1 <例1>松尾芭蕉『おくのほそ道』

月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふるものは日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。

…

[課題] ①②のうち、一つを選んで、作文しなさい。（①省略）

②冒頭に、芭蕉の「先人」として李白・杜甫へ敬意を表していることをどう考えますか。

「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」は、松尾芭蕉が生命に対する考えを現している。昔からの賢人が多く旅の中でなくなった人がいる。自然の美しい景色に対して命は無常なことであり、わびさびという寂寥感が出てきた。李白の「春夜宴桃李園序」中でもこのような感想を表現する。「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」は時間と空間を背景として、万物の宿命を感嘆する。しかしながら二人とも、宿命を感嘆する上、生命に対する積極的な態度も現れた。宿命ということへの反省は、自分の人生の意義、あるいは生活方式へ突っ込んで考えとなる。生命の長さは限界があるが、どのように人生を有意義に過ごすかが重要である。自然からの楽しみ、あるいは天倫之樂からの楽しみ、どちらも生命を迫及する表現である。このような楽しさを迫及して、宿命の無常感からの痛みに少しずつ対抗できるではないか。

資料 2 <例 2>上田秋成『雨月物語』『菊花の約』

青々たる春の柳、家園みそのに種こゑることなかれ。…播磨はりまの国、加古かこの駅うまやに丈部はせべ左門さもんといふ博士あり。清貧を憇あまなひて友とする書ふみの外はすべて調度てうどの煩わづらはしきを厭いとふ。老母あり。孟子もうしの操みさをにゆづらず。常に紡績うみつなぎを事として左門がこころざしを助く。其の妹なるものは同じ里の左用氏さようぢに養はる。此の左用さよが家はすこぶる富みさかえて有けるが丈部母子の賢きを慕したひ娘子をとめを娶めとりて親族となり…

【課題】「菊花の約」は…のような翻案または翻訳文芸について、あなたの考えを述べなさい。

中国明代末期の「范巨卿雑黍死生交」は日本に伝われ、「雨月物語」という翻案小説の中の「菊花の約」という一節に改編された。ストーリーのあらすじや描写手法は似ているが、人物設定や環境描写についてはたくさんの異なった部分もある。「菊花の約」は「范巨卿雑黍死生」と同じように、友情と約束のことを物語った。またこの二つの文章の初頭には同じく柳の描写と論述を通して、軽薄な人への批判を表した。柳のことと物語と合わせて、交際上注意すべき点は自然と読者に強い印象を残した。表したい道理が同じだが、両文章の中には、人物設定と環境描写に関してだいぶ違うところもたくさんある。たとえば、「范巨卿雑黍死生交」の主人公は「姓張名劭字元伯」秀才である。これは中国の明代の時代環境に適応する身分で、当時中国の読者にとって身近で発生しているようなことであろう。その一方「菊花の約」の主人公が「播磨国加古宿に丈部左門といふ学者」であり、武士の友達の家を訪れることになった。①このような人物と環境の設定は翻訳者が江戸時代の背景と合わせて作り直した結果だと思われる。翻訳者の自主的な改編より、「范巨卿雑黍死生交」は新たな形で日本で知られるようになった。

資料 3 <例 3 / 4>世阿弥『風姿花伝』

秘する花を知ること。秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず、となり。…まづ、この花の口伝におきても、ただ「めづらしきが花ぞ」と皆知るならば、「さてはめづらしきことあるべし。」と思ひまうけたらん見物衆の前にては、たとひめづらしきことをすると

も、見手の心にめづらしき感はあるべからず。見る人のため花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。…

【課題1】『風姿花伝』に見られる演劇芸能論が、以下の『大鏡』「道兼伝」のエピソードで、具体的にどう実現されているかを論じなさい。

この栗田殿の…太郎君は福足君…東三条殿の御賀にこの君舞をせさせ奉らむとて…その日になりて…舞台上に上りたまひてものの音調子吹き出づるほどに「わぎはひかな。我は舞はじ」…御をぢの中関白殿のおりて舞台に上らせたまへば「言ひをこづらせ給ふべきか。また憎さに耐へず追ひおろさせ給ふべきか」と方々見はべりしに、この君を御腰のほどに引きつけさせ給ひて御手づからいみじう舞はせたりしこそ、楽もまさりておもしろくかの君の御恥も隠れ、その日の興もことのほかにまさりたりけれ。祖父殿もうれしと思したりけり。又大臣はさらなり。よその人だにこそすずろに感じたてまつりけれ。(大鏡)

【課題2】『風姿花伝』…と比較しつつ…あなたの知る古代演劇を紹介しなさい。

<例3> 課題文の『風姿花伝』では、「人の心に思ひも寄らぬ感を催す手、これは花なり」と述べている。つまり、諸芸能にとって、一番大事なポイントは見どころを秘事にすることである。『大鏡』の「道兼伝」のエピソードを読むと、まさにこのような演劇芸能論を反映していることがわかった。「道兼伝」のエピソードによって、道兼の子・福足君は兼家の前で舞うことを嫌がり、舞台の上でわがままに舞いをやめた。すると、御伯父の道隆が舞台に上がった。在席の人々はこれから福足君を宥めたり、怒って福足君を舞台から引き落としたりするに違いないと予想していたが、道隆は自ら舞い始めた。皆はこの意外な展開に驚いて、また、道隆の見事な舞いを観て喜んでいた。このエピソードの中に道隆は人々の予想通りに行動することではなく、皆の予想以外なことをやった。それで、皆が思いも寄らない感動を受けて嬉しくなったのである。道隆の対応はまさに、ひとつの悪い出来事を芸能の「花」に変えたことである。

<例4> 『風姿花伝』には「秘する花を知ること。秘すれば花なり秘せずは花なるべからず、となり。この分け目を知ること肝要の花なり。」とある。私のふるさと蘇州では昆劇という古い演劇がある。昆劇もこの理論に当てはまると思う。昆劇は京劇より古くて、蘇州弁と巧妙に結合したなめらかで優しく聞こえる節回しはその特徴である。明の時代蘇州の人々は優れた自然資源に恵まれ、豊かな生活を暮らしていた。その中で、昆劇は娯楽の一種として登場した。昆劇は古い蘇州の生活と文化を理解するのにとても役立つ伝統文化である。初めて昆劇をみたのは小学校五年生の時だ。地域文化を広く市民に伝えるために昆劇の鑑賞は蘇州の学校教育に義務付けられた。しかし、あの時私は昆劇について何もわからなかった。中学校、高校の時はまた一クラスで昆劇の鑑賞に行った。そして段々昆劇の魅力を感じた。舞台の両側にはセリフがある。セリフを見ながら、昆劇の発音は蘇州弁によく似ていると意識した。またストーリーもとても有名である。例えば東のシェイクスピアと呼ばれる湯頭祖は「長生殿」という楊貴妃と唐玄宗のラブストーリーを描いた作品を創作した。そのほか武術を加えた激しい演目もある。②2001年昆劇はユネスコ無形文化遺産に登録され、その価値を認められた。『風姿花伝』の中では「秘すれば花」という芸術論を提唱している。それは観客に意外と思わせ続けることで、

舞台に集中させ、緊張感を持たせ続ける展開とするという意味と考える。すると昆劇の特色あるストーリーもこの理論に当てはまる。昆劇は私達現代人にとって秘密に満ちたものだからこそ「花」を開かせているのである。崑劇のこういう点を多くの人に知らせる必要があると思う。

#### 資料4 <例5> 吉田兼好『徒然草』

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑きころわろき住居は、堪へ難き事なり。…造作は、用なき所を作りたる、見るも面白く、万の用にも立ちてよし…

〔課題〕 現在…徒然草に見られる住居観は見直されています…住居は単に人の住む場所ということを超えた文化であることについて、他の古典も紹介しつつ、あなたの考えを述べなさい。

<例5> 『徒然草』から感じたのは古代日本人の美意識である。つまり、「さび」、「わび」という幽玄な境界だといえる。中国の唐の時代、詩人の劉禹錫が『陋室銘』に「山は高きに在らざるも、仙有りて則ち名とす。水は深きに在らざるも、龍有れば則ち靈たり。斯の是き陋室なるも、惟だ吾れ徳馨あればなり。」と書いた。その中から表したのは中国人が「道德」を重んじることである。どんな陋屋でも品徳が高尚であれば、立派な建物になるに違いない。また宋の時代、詩人の陸游が「雲山万壘猶嫌淺、茅屋三間已覺寬。」と書いたが、古代中国人の自然観が明らかになった。それは住む場所より、自然の方に親しむ。③清の時代になると、曹雪芹の『紅樓夢』にある『好了歌』から「陋室空堂，當年笏滿床；衰草枯楊，曾為歌舞場。」という古代中国人の人生観が見える。人生は榮枯盛衰、盈虚、変化しつづくものである。歴史は偶然と必然が満ちている。日本の江戸時代において、歌人の与謝蕪村が「春雨や人住みて煙壁をい洩る」を詠んだ。春雨、煙と廢屋が取り合わせられ、縹緲たる詩情を紙に浮かべた。そして、小林一茶の「名月の御覽の通り屑家かな」は、月と家の組み合わせから、静かな雰囲気を与えた。その中から、古代日本人の自然と家の調和が見えるだろう。中国人の「家」を通じて、情緒を表すのに対して、日本人が家を自然の一部として扱っているのではないかと考えている。古代の中国人にしても、日本人にしても、「家」を論じるとき、ただ単に住む場所を説くのではなく、その中から中国と日本の文化や特質が明確に表れている。現代になると、核家族や個人家族の増加につれて、古い「家」概念もだんだん変化した。家庭構成が変わったからこそ、住む場所の「家」も変わった。一人暮らしのケースが日本でも中国でもどんどん増えてきた。また、オタク文化もサブカルチャーの一種として注目を浴びている。特に日本において、少子高齢化で、年を取ったひとに暮らしやすい場所ができるように、たくさんの建築家が力を注いでいる。要するに、現代人の家は様々な形で存在しているし、一人ひとりの生活スタイルにふさわしいのを重視している。中国の場合は、「家」といえば、若者に圧力を感じさせたものである。なぜかというと、中国のマンションの値段が高く、若者の料金でほとんど負担できないからである。それゆえに、たくさん人が、家を買うことを夢としてもおかしくない。しかし、そのようになったら、お金、人生の価値及び人生の楽しみが「家」に縛られる恐れがあるかもしれない。快い住む場

所を見つけることが大事であるのを否定しないが、それを人生の唯一の課題としない方がいいと思われる。さらに、個人化の進展につれて、皆が何をしても、まず「自分」を考えている。しかし、個人化になればなる程、「共同意識」や「共同価値観」が弱くなる。もし「共同意識」が弱くなると、社会を保つ原動力や国々の文化や文明を継承するのが難しくなるかもしれない。従ってそれを改善するために、「家」から改善すべきではないかと考えている。古くからの「家制度」や「家庭形式」を復活するのではなく、新しい「家」の共同意識を培養するところである。例えば、一人暮らしの人に近所の人との付き合い合う場所を作るとか。そのような改善がただ単に一人一人を保護するだけではなく、「共同文明」も保っている。いずれにしても、人間が他人との繋がりで生きているし、人間であるからこそ弱いものである。そこで「共同意識」はかけてはいけないものである。学生である私は、今、寮でルームメイトと一緒に住んでいるが、もし一人になったら、どのように生活すればいいのか、どのように社会に適応すればいいのかを考えなければならない。どの時代においても、変わらないのは「家」ではなく、人間の生存方式であると思っている。

資料5 <例6> 『平家物語』

三位これを開けて見て「かかる忘れ形見を賜はりおき候ひぬる上はゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず…感涙おさへがたう候へ」とのたまへば、薩摩守喜んで「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。うき世に思ひおくこと候はず。さらばいとま申して」とて…そののち世静まつて千載集を撰ぜられけるに忠度のありしありさま言ひおきし言の葉今さら思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちにさりぬべき歌いくらもありけれども勅勘の人なれば名字をばあらはされず「故郷の花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ詠み人知らずと入れられける。さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな

【課題】①か②か③を選びなさい。(①②省略)

③…日本文学には、歴史の敗者・弱者に優しく、勝者・強者に対して厳しい目を向けている作品が多いです。このような例を紹介しつつ、あなたの考えを述べてください。

<例6> 『平家物語』は日本の「反逆の文学」の代表的な作品の一つだ。中国ではこのような敗者・弱者に優しい目を向けている作品がそれほど多くはない。「反逆の文学」と言ったら、頭にすぐ浮かんできたのは太宰氏の『人間失格』のことだ。この本を読んだあとで、私は「人間としての資格」を悟り始めたのだ。実は葉蔵にしても、太宰治にしても、『平家物語』の主人公にしても、誰もが社会から離れてしまった人間として、敗者、弱者と認識されてしまったのだ。彼らは敏感だったが、それこそ、心には実に豊かで鮮やかな世界があった。彼らは一生を通じてこの世に慣れようとしていたが、なかなかできなかったのだ。誰よりもより一層他人に理解してもらいたかったのに、結局他人に認められなかった。『平家物語』や『人間失格』などの作品を通じて、登場人物本人の直接の発言からでなくとも、私たちは敏感な人たちの世界に入ることができるので、これらの作品が敏感な人とほかの人間とのかけ橋のような役割を果たしているのだ。「崩

壊」、「放棄」をテーマとして書かれた「反逆の文学」を読んで、心もなんとなく暖かくなった。これはまさに「反逆の文化」の魅力ではないかと思う。

### 3. 作文例の分析

まず引用について分析する。作文学習者は適切な引用の仕方を学ぶことで作文の質を高める技法を会得する<sup>(4)</sup>。〈例5〉は6例、他は2例を引用している。補注に指摘した文を引用するのは〈例1/2/3〉、自分で探し出してきた文を引用するのは〈例2/5/6〉である。異文化比較を引用の目的とするのが〈例1/2/4〉、時代比較を目的とするのが〈例3/6〉、そのどちらも目的とするのが〈例5〉である。文単位で引用するのは〈例1/3/4〉、文単位引用と要約引用を併用するのが〈例5〉、要約引用は〈例2/6〉である。有名句文を引用するのは〈例1/3/4〉で、〈例5〉は有名句と内容要約を併用している。

現代文を教材とした作文指導では学習者の自説部分と引用部分の境が曖昧化しがちだが、これらの作文にはそれがない。学習者が現代文と明らかに異質な古典文の引用を考える過程で、自説部分と引用箇所を明確に区別しながら考えるためである。古典語句を現代文に取り込んでも本文を難解化せず、内容の具体性や説得力を高めることに成功している。

次にキーワードと自説展開について分析する。キーワードに課題文中の語句を用いたのは〈例3/4〉の「花」、〈例5〉の「家」である。自分で考えた語句を用いたのは〈例1〉「宿命」、〈例2〉「環境」、〈例6〉「反逆」である。これらキーワードを用いて自説をどう展開しているかを見ると、〈例1〉は「生命への積極的態度が宿命の痛みを克服できる」、〈例2〉は「環境に適応できる翻訳が古典となる」、〈例3〉は「「秘する花」はマイナスにもプラスに転じられる」、〈例4〉は「昆劇にも『風姿花伝』にいう「花」がある」、〈例5〉は「家は時代・地域の生活様式・意識を表す」、〈例6〉は「崩壊・放棄」の要素を持つ作品には感動がある」としている。いずれもキーワードを媒介とし、古典本文の内容を咀嚼し、自説と有機的に関連づけている。たとえば〈例3/4〉は同じ課題文から同じキーワード「花」を選びつつも、各著者の原文の理解が異なるゆえ、異なった展開をしている。〈例5〉は課題文のキーワード関連の諸例を自分で調べ、自説を導いている。

現代文教材で指導した場合、学習者は課題文の、緻密に論理構成されたキーワード周辺を理解不十分なまま、書き写す傾向がある。それでは自説と適切に関連づけようがない。古典は論旨もキーワードも現代文に比べ単純明快ゆえ、日本語に不慣れな学習者でもそれを見つけやすい。それでいて、訳・注を参考に原文を自分自身の言葉で言い換えられるぐらい考えないと、作文に引用できない。現代文を教材とした場合、学習者は課題文の一部をそのままを貼り付けて何となく立派な日本語作文を作れた気分になれても、古典教材では教材の性格上それができない。古典文は現代文と明らかに異質であるからだ。

次に作文の構成、論点把握と展開について分析する。〈例1〉は日中思想比較を論点に古典に人生論を学ぶと論ずる。〈例2〉は日中文学比較を論点に翻案の意義の発見を論ずる。〈例3〉は「芸能のポイント」を論点に古典芸能論を展開する。〈例4〉は日中演劇比較を論点に日本古典の演劇論を中国演劇に応用している。〈例5〉は古今比較と日中比較を論点に、現代社会に古典の智慧を生かす議論を展開する。〈例6〉は反逆の文学を論点に時代を超えた文学作品間の共通点を論じている。古典には時代を超えた深淵さがある。学習者がこれを作文の対象とする時、心に残る発想や論法に出会える可能性は、現代文よ

りも高い。古典の何が、なぜ、どのように心に残るかは学習者ごとに異なる。それが多様な論点把握と展開という形で、作文に反映する。たとえば<例2>下線①である。「菊花の約」が「范巨卿雑黍死生交」を江戸時代読者に親しみやすく翻案していることは学習者の何人かは気づくだろう。が、それが中国文学を日本人に親しませる契機ともなるという発想は、作文筆者が古典の翻案という論点を主体的に考えて得た、本人だけのものである。

古典における表現をどう作文に生かしているかを分析する。<例1>は日中で共通の「百代の過客」という句をめぐり、「生命を追及する表現」つまり生きる智慧として生かすことに結びつけている。<例3>は「思ひも寄らぬ感を催す手」と類似する表現を他文献に発見しながら議論を進めている。<例4>は「秘すれば花」という句に関連させ、崑劇にも「花」のあることを論じている。<例5>は「家」をキーワードに日中古典の用例を博搜し自説形成に生かしている。「月日は百代の過客」とか「秘すれば花」とかは有名句でもあるが、<例1/4>を見ると、古典原文を直接講読した学習者でなければ発見できないことが書かれている。たとえば<例4>下線②である。「秘すれば花」を「秘密にするから上手に見える」という現代語訳で学んだ者にでも「これは俳優にとっての『能ある鷹は爪を隠す』的な教訓だ」とまでは理解できよう。しかし、下線②のように脚本ストーリーに意外性をもたせることも「秘すれば花」の例であるとまで、発想を広げられるだろうか。

最後に、時代を超えて生き続け、当該文化の共通認識となっている古典が作文にどう生かされているかを分析する。<例1>は日中共通の人生論に照らし、宿命に対抗してきた古人のあり方を現代に生かそうと提唱する。<例2>は語学学習者として、近世に成功した翻案/翻訳古典の創作性を現代に生かそうという。<例3>は長い歴史の中で形成された古典の芸能理論は時代を超えて生かせることを論じる。<例4>では古典芸能理論は地域を越えて生かせることを提唱している。<例5>は現代人として家をどうとらえるかの考察に古典を生かしている。<例6>は「反逆」のモチーフを時代の異なる二作品に共通する要素と捉える。いずれも古典と現代との共通項を見だし、古典の論理で現代文化を相対化する姿勢がうかがわれる。

現代文教材を用いた場合、学習者にとって外国語である日本文の複雑な論証を理解できないまま、課題文そのままを書き写した『援用』、課題本文を感情的に否定しただけの『反論』となることが多い。それに比べ、古典教材を課題文とした作文は、生産的に課題文を生かしている。学習者が、古典原文を現代日本語で考える過程を通じ、現代文化・社会を相対化するヒントを見つけるからだ。たとえば<例5>下線③は複数の古典文を引用する度に現事情と照らし合わせ、徐々に議論を深めることで古典を生産的に生かし、現代社会を相対化することに成功している。

#### 4. むすび～心を古風に染め詞を先達の者に習ふ／古人の涎をなむる事なかれ

藤原定家は「心を古風に染め詞を先達の者に習はば誰人かこれを詠ぜざらんや」と断ずる。日本語学習者が日本古典を誠実に学べば、必ず達意の日本文を書ける。ただし芭蕉が「かりにも古人の涎をなむる事なかれ」と戒めるよう、それには批判的思考が必須である。

今回は、中国において、古典本文講読と課題の組み合わせを工夫しつつ作文指導をした実例報告にとどまった。今後、中国以外の地域でこれをどう修整すれば同等以上の学習効果を得られるのか、また影印読解や書き取りも組み合わせることで効果を上げられるかな



どを視野に入れつつ、さらなる工夫を重ねていきたい。

(菊地真きくちまこと・カイロ大学・mark2008@hotmail.co.jp)

## 注

1. 詳しくは菊地（近刊）参照
2. 2016-2018年の9-12月は4年生、2019年2-5月は3年生に古典講座が開かれた。
3. 紹介例より文法の正確さ・語彙の用法等で優る作文は他に十数例あった。また紹介作文中の下線は私に附した。〈例2〉と〈例4〉は同じ筆者である。
4. 引用が上級学習者の作文に必須なことは、駒田他（2008）等が論じている。

## 参考文献

- 藤原マリ子（2004）「古典教育の再生を目指して」『国文学言語と文芸』121，おうふう，83.
- 池田亀鑑（1991）「クラシックと古典の結合」『古典学入門』，20-22.
- 石塚修（2007）「これからの日本社会で古典教育がはたす役割はどうあるべきか」『人文科教育研究』第34号，筑波大学，75-86.
- 加藤康子（2007）「古典を学ぶ喜び」『ことばの学び』14号
- 勝又基（2019）『古典は本当に必要なのか否定論者と議論して本気で考えてみた』文学通信
- 菊地真（2019）「中国の大学における日本古典教育」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第11号，73-80.
- 菊地真（近刊）『日本語学習者のための日本古典』学術研究出版社
- 駒田朋子・安井朱美・山田真理（2008）「上級学習者の作文を評価する」『南山大学国際教育センター紀要』第9号，71-85.
- 串田紀代美（2016）「日本研究のための文語文教育の歴史」『日本研究センター教育研究年報』第5号，67-93.
- 渡辺修（1955）「解釈のための文語文法の学習指導」『中等教育資料』4(6)文部省教育課程課，10-13.